時を表す副詞　～「すぐ」の考察～

宮崎　涼子

はじめに

この研究は、時に関わる副詞の現代語における意味を正確に捉えたいと思ったことから、出発している。語は普通、語全体としての意味を持ち、文法的環境や意味的環境によって、用法ごとの意味を持っている。それらがどのようなものかを正確に把握するには、実際に使われている用例に基づく他ないであろう。

時に関わる副詞についても従来様々に研究され、辞典にはその成果が盛り込まれていると考えられるが、使用の実態を十分に反映しているかどうか、疑わしいところもある。そこで、実際の使用例に基づいて意味の実態を調査し、現代語としての副詞の意味を捉え直すことにした。本稿の基となっている修士論文では、以下に示す十八語について、考察した。

事態の進行の仕方を表す副詞
　A事態の進行のスピードを表す
　　たちまち・急速に・ゆっくり
　B事態の継続のさまを表す　　ずっと
事態の生起の仕方を表す副詞
　A事態の起こり方の急激さを表す
　　突然・突如・いきなり・にわかに
　B事態間の時間の短さを表す
　　すぐ・すぐに・すぐさま・じき・じきに・ただちに・やがて・まもなく
　C頻度に関わり、常時生起するさまを表す
　　いつも・常々

本稿では、この中から「すぐ」を取り上げ、現代語における語の実態を再考する。

用例調査には、以下に示す、一九七〇年以降に現代共通語で発表された一般資料（新聞や雑誌）及び文芸資料（小説やエッセイ）を用いた。＜＞内は本稿中での略号である。

◆一般資料(新聞・雑誌)

『朝日家庭便利帳』　朝日新聞社　＜朝家＞
『朝日新聞（十二版）』　朝日新聞社　＜朝日＞
『CAT cross and talk』　アルク　＜CAT＞
『月刊日本語』　アルク　＜日本語＞
『ぱそPASO』　朝日新聞社　＜ぱそ＞

◆文芸資料(小説・エッセイ)

『医者のホンネ』柴田二郎　新潮文庫(一九九五)　＜医者＞
『広告みたいな話』天野祐吉　新潮文庫(一九八五)　＜広告＞
『食心理学』矢島一夫　近代文芸社(一九九二)　＜食＞
『父をたずねて三千円』岩本敏男　くもん出版(一九八九)　＜父＞

『時を背く染めて』高樹のぶ子　新潮文庫(一九九三)　〈時〉
『文車日記』田辺聖子　新潮文庫(一九七八)　〈文車〉
『まぐまぐこぐま』岡信子　日本教文社(一九七九)　〈まぐ〉
『モーツァルト荘』三浦哲郎　新潮文庫(一九九〇)　〈モ〉
『優雅で感傷的な日本野球』高橋源一郎　河出文庫(一九八一)〈優雅〉
『読むクスリ　PART9』上前淳一郎　文春文庫(一九九一)　〈よ〉
『四十一番の少年』井上ひさし　文春文庫(一九七四)　〈四〉
『ろくべえまってろよ』灰谷健次郎　新潮文庫(一九八七)　〈ろ〉
『ロンドン旅の雑学ノート』玉村豊男　新潮文庫(一九八三)　〈ロン〉
『私の文章修行』週刊朝日　編　朝日新聞社(一九八四)　〈文〉
『ヴィーナスのえくぼ』加賀乙彦　中公文庫(一九九二)　〈ヴィ〉

〔一〕「すぐ」の意味

1 現行の国語辞典での捉え方

最初に、意味を正確に捉えるために、「すぐ」がどのように記述されているかを現行の国語辞典で確認すると、

(a)意味を一つとする辞典の記述（『広辞苑』）
(b)意味を二つとする辞典の記述（『学研国語大辞典』他八冊）
(c)意味を三つとする辞典の記述（『外国人のための基本語用例辞典』（以下『外日』と略記）他二冊）

の三種類があった。そこで、以下で記述の内容を各グループごとに検討する。

(a)意味を一つとする辞典の記述

【すぐ】　ただちに。さっそく。ごく近く。

「ただちに」「さっそく」は、時間の短いさまを表し、「ごく近く」は距離の短いさまを表す語だといってよいだろう。したがって、『広辞苑』は「すぐ」を、時間や距離の短いさまを表わす語だと捉えているといってよい。

(b)意味を二つとする辞典の記述

【すぐ】　①時間の間をおかないようす。
　　②距離の間をおかないようす。非常に近い距離であるようす。

ここでは、(a)で一つのブランチにまとめられていたものが、時間と距離の二つに分けられている。記述内容は(a)と基本的に同じだが、意味を正確に把握する点からいえば、(b)のほうがより正確な記述だといえる。

ただし、その中で『新選国語辞典』（以下『新選』と略記）では異なる記述をしている。

【すぐ】　①時間・距離のごく近いようす。
　　②たやすく、簡単に。

①が(a)の記述に相当し、その他に②の「たやすく、簡単に。」が挙げられている。このことに関しては、後でまとめて(c)のところで考察する。

(c)意味を三つとする辞典の記述

【すぐ】①時間がかからないようす。急に。
　　②かんたんに。
　　③きょりがたいへん近いようす。

ここでは、(a)・(b)で挙げられていた時間・空間の二つの意味の他に「簡単に」の意味が立てられている。その点で、

これと先に挙げた『新選』の記述とは基本的に同じだと言ってよい。

2「簡単に」の用法

以上で問題となるのは、「すぐ」の意味の一つとして「簡単に」が記述されるべきかどうか、ということである。そこで、以下、その点について辞典で「簡単に」の例として挙げられた用例に基づいて検討する。

辞書での「簡単に」の用例は次のようなものである。

①安い物はすぐこわれる。（『外日』）
②すぐ故障する。（『新選』『集英社国語辞典』）
③あの子は小さなことでもすぐなく。（『外日』）
④すぐおこる人（『岩波国語辞典』）
⑤あの人の家はすぐ見つかった。（『外日』）

これらの例は、時間や空間の意味とは別に「簡単に」の意味を認める根拠となりうるのだろうか。

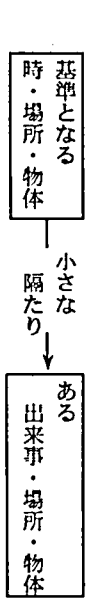
次の⑥が時に関わる意味の例で、⑦が空間に関わる意味の例である。

⑥用があるからすぐきてください。（『外日』）
⑦ぼくの家は駅(えき)からすぐだ。（『外日』）

⑥の「すぐ」は、「用があるからすぐきてください」と発話者が発話した時から、相手が発話者のもとに「くる」のが、短時間のうちに成立することを意味している。時間の意味の「すぐ」は、基準時から間を置かずにある出来事が起こることを意味する。

⑦の「すぐ」は、基準になる物体や場所（「ぼくの家」）からもう一つの物体や場所（「駅」）までの距離が短いことを表す。

以上の時間と空間の意味に共通することは、「出来事」同士や、「場所・物体」同士の隔たりの小さい様子を表していることである。これらの意味特徴を図示すると次のようになる。



それでは、上の①～⑤はどうだろうか。

①～④の「すぐ」は、何らかの事態が起きてから、①は物が「こわれる」まで、②は物が「故障する」まで、③はあの子が「なく」まで、④は人が「おこる」までの時間の短さだけを、単純に表わしてはいないようである。なぜそのように感じられるのだろうか。

なお、⑤については後ほど述べることにする。

さて、ここで注目されるのは、①～④の「簡単に」の意味が、次の二つのパターンをとる時に出現していることである。

①②③……［名詞］ハ スグ［動詞（現在形）］
④……スグ［名詞］［動詞（現在形）］

まず①～③について考えてみる。

①は、次の三つの条件を併せ持つことで、「簡単に」の

意味が生じていると考えられる。

(a)「ー八〜」という主題・解説の文型である。

(b)主題部分が、総称名詞である。

(c)解説部分が、動詞の現在形である。

「ー八〜」の文型は、主題文と対比文に分けられるが、①の例は主題文である。主題文での「名詞＋八」の部分は、ある対象を話題として取り上げる意を表す。この部分を主題という。それに続く部分で述べられるのは、この主題に対する説明だといってよい。つまり、この「ー八〜」という文型は、主題を掲げそれについての解説をする表現なのである。この用法の一つに、主題がどんな性質を持つものかを示すものがある。

(b)のように、総称名詞が主題の部分を占めると、ある特定の出来事を述べる文にはなりにくい。ある特定の出来事は、特定の個によって起こされるものだからである。そこから、主題を特定の個と限定しない「総称名詞＋八」の形を持つ文では、主題として挙げたもの一般にいえる性質を示すことになる。だから、①は「安い物」一般にいえる性質を表す文であり、その解説部分の述語は動詞の現在形でないと文として成立しない。

では(c)についてはどうだろうか。動詞の現在形は、未来の出来事を表すか、普遍的真理や性質などを表す場合に用いられる。ここでは、「地球はまわる。」のような、後者の例だと解釈できる。

②の例は(c)の条件だけを満たしている。主題が「ー八」の形で明示されていないが、現代人は②の例を見ると基本的に、何かを補って「ー八〜」の形を作って、文の内容を理解しようとする。たとえば主題部分に、「これは」と補って、「これはすぐ故障する。」とすれば、「これ」という特定の物の性質規定をした文になる。そうすると②の例は、次に挙げる③の例と同じ条件を満たした文だといえる。

さて、③の例は、(a)・(c)の他に次の条件を満たしている。

(d)主題部分が「個体名詞＋八」の形になっている。

主題は「あの子」であり、③は、「あの子」という特定の人物について述べた文となる。①とは異なり、特定の人物が起こした特定の出来事について述べた文だと解釈することもできるため、述部が過去形をとることもありうる。つまり、「あの子は小さなことでもすぐないた。」という文ならば二通りに解釈出来る、ということである。

特定の人物が起こした特定の出来事について述べた文だと解釈すると、「あの子」がある「小さなこと」をきっかけにして間を置かずに「ないた」という一回の出来事を、過去の事実として表したことになる。もう一つの解釈は、今はそうではないが、「あの子」はある時期、たとえば子ども時代に、「小さなこと」でも何かというとしばしば「ないた」いわゆる泣き虫だった、という過去に持っていた性質を表すというものである。このように動詞が過去形をとった場合、二つの解釈が成立するので文意は文脈に依ることになるので、常に性質規定の文であるとは特定できない。

しかし、③の例の解説部分の動詞は現在形「なく」なので、「あの子」の持っている性質を表す文としかなりえない。

主題文で重点が置かれているのは、主題の部分よりもむしろ主題についての解説の部分だといえる。主題の部分は、何が解説の対象であるのかを示しているのに過ぎないのである。だから、何が主題であるのかが、会話に参加している人や文の読み手に明らかである場合は、主題部分を省略した②の例のような表現がされるのである。

また④の例のように連体修飾の形をとった場合も、あるものの性質を規定する。動詞の現在形をとった連体修飾部分は、「後続する体言の表わす意義内容を詳しく限定するもの（『日本文法大辞典』【連体修飾語】の項より）」である。

この形は、体言の表す人や物についての解説をしている点で、主題文「ーハ～」の文型と共通している。だから④は、「（ある）人はすぐおこる」という主題文と同じ意味内容を示し、ある「人」が持つある性質のせいで、何かきっかけさえあれば、間を置かずに「おこりがち」だということを意味している。

以上で考察した①～④の「すぐ」は、本質的には、ある人や物がある性質を持つことを意味する。何かきっかけとなる出来事があり、それが起こるたびに同じ出来事が反応するように起こる、という繰り返しが現象として見られる。その二つが相互に関係している、つまりある人や物がそうなる性質を持っているから、出来事の繰り返しが起こりがちなのだ、と一般的に考えるから、この「すぐ」は「簡単に」の意味を持つのである。この意味を図示すると、次のようになる。

「きっかけ」―短い時間→「ある反応」
「きっかけ」―短い時間→「ある反応」
「きっかけ」―短い時間→「ある反応」
・・・
「簡単に」繰り返される「　」の動き
（きっかけとなる出来事は同種、ある反応は常に同じものである）
⇩
ある人あるいは物が、そうなる性質を持っているから起こること

以上により、(a)～(d)の条件を満たした形をとることによって、「簡単に」そうなるのだ、という意味が「すぐ」に生まれてくるということがわかった。また、この場合、時間の意味の図である

「基準時の出来事」―短い時間→「出来事」

によく似た形が繰り返されているので、「簡単に」の意味は時間の意味を保持しているといえる。しかし、①～④に

は意味が確かに存在するのだから、「簡単に」の意味を立てるべきである。つまり『外日』（あるいは『新選』）は、「簡単に」の意味を記述していない辞典に比べて、意味の把握がより正確だということになる。

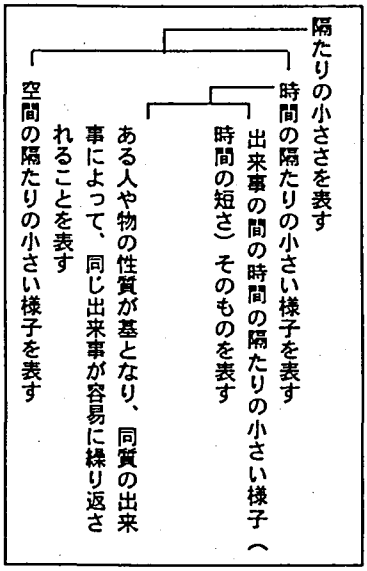
さて、残った⑤の例は、「簡単に」の意味ではなく、時間の意味の中に含めるべきものである。事態の繰り返しではなく、一回の出来事について述べた文だからである。この用例の「すぐ」は、新たな事態が実現するまでの時間が短いことから、そんなに時間をかけないで苦労なく事を成し遂げられるという意味で、「簡単に」という訳語を出しているのではないか。そうすると、この⑤の例の「すぐ」には「間を置かずに」という時間に関わる意味が、まだかなり強く残っている。この例における「簡単に」の意味は、ニュアンスに過ぎないのである。

3「すぐ」の意味像

さて、そこで元に戻って、①～④の「簡単に」の意味は、(c)グループの辞典ではどれでも、時間の意味と空間の意味との間に記されている。この序列には何か理由があるのか。

①～④の「すぐ」は、習慣性が意味の中心となってはいるが、ある事態が起こるともう一つの事態が間を置かずに起こるという点で時間と無関係ではない。これは前に示した説明及び時間の意味の図と「簡単に」の意味の図がよく似ていることからわかるだろう。そしてまた、②を例として考えると、何らかのきっかけとなる出来事があって、それから泣くまでの時間が短く、かつ小さな出来事でも何かといえば繰り返しあの子は泣きがちだ、ということになる。二つの事態の間の時間が短いという意味を保持しつつ、その関連した事態が繰り返し起こりやすいという意味が付加されていることから、これらを時間そのものの意味の下位に位置づけるべきである。

以上の考察を踏まえて三つの意味の関係を図示すると、次のようになる。



[II] 現代語における「すぐ」の実態

1 現代語の使用例の分類

さて、「すぐ」の意味が上記のようなものであるとして、我々現代人の言語生活において、それらの意味は互いにどのような位置付けをされているのだろうか。まず、現代語での実態を確認するために、上の意味分類に従って現代語の使用例を分類してみることにする。

(a)時間の意味の例

時間の短さそのものを表すもの〔一三一例〕

(ア) 基準時を明示したもの〔四十五例〕

この例の典型的なものが⑧である。

⑧民宿に部屋を取るとすぐゲレンデに出た。　ヴィ57

⑧は部屋を取った時を基準時として、そこからゲレンデに出るまでの時間の短さを表わしている。

(イ) 基準時を明示していないもの〔五十五例〕

また、時間の短さを表す際の基準時となる出来事を特に示していない例もある。その中には二種類ある。

(イ) −1 発話時に基準を置くもの〔五十五例中三十五例〕

⑨「すぐ切ったらどうだ」　ヴィ　24

のように、発話時に基準を置くものがある。⑨の場合、発話時から、電話を「切る」までの時間の短さを「すぐ」が表す。これに類するものは二十二例あった。

会話文あるいは会話の引用の例が、このグループを占めた。会話は音声によるものであるから、複雑な文脈の中で基準となる出来事を示すことは難しい。だから、常に発話時を意識して、時を示す傾向が強いのではないか。

また、次のように、

⑩「…きみと一緒に暮すためなら、喜んで今すぐ帰るよ」　ヴィ　283

と、「今すぐ」という形で「すぐ」を用いると必ず、発話時の現在が時の短さを表す基準の時点となる。その例は十三例あった。

(イ) −2 出来事に基準を置くもの〔五十五例中二十例〕

基準時を明示していないもう一つのパターンは、基準時の省略があって、その文中からはわからないものである。たとえば、

⑪すぐウジがわく。　朝日1995.6.23.

は、どの時点から間を置かずに、「ウジがわく」のかが、この文だけではわからない。しかし、前の文の「傷病兵の傷口にハエがたかる」によって、その「ハエがたかった」時点を基準として、そこからの時の短さを表していたのだとわかる。時間の経過の順に出来事について述べられていることが多いので、原則的には前の文にその基準となる出来事が示されている。

「簡単に」という意味がニュアンスとして感じられるもの〔三十一例〕

(ア) 客観性が強いもの〔三十一例中一例〕

さて、やや客観性を持ちながら、ニュアンスとして「簡単に」の意味が感じられるものをまず挙げてみる。

⑫食事のときだけではない。街でもオフィスでも、すぐ議論が始まる。　よ 163

はアテネの街でよく見かける光景について述べた文である。

「アテネでは、街でもオフィスでも、すぐ議論が始まる。」

と波線部の言葉を補って考えてみる。アテネという街の性質規定の文かと仮定してスグ～スル「人或いは物」の形に変えてみると、「すぐ議論が始まるアテネ」となる。実際はギリシャ人の性質が議論好きなのである。「街でもオフィスでも」どんな場面でも、数多くの人が同じように議論をし始める、という内容から、街の性質（土地柄）を思わせる文なので、主題文の形或いは連体修飾の形で表される、「簡単に」のニュアンスを強く感じる。しかし、⑫はそもそもその形をとってはいないから、主題・解説の文とはいえない。「デハ」という助詞を用いることによって、「アテネ」という場所の特定をしているにすぎない。そう考えるとこれは、時間の短さの意味に「簡単に」の意味のニュアンスが加わったものであり、先に挙げた主観性が強いものの用例よりもそれが強く感じられる点で、判断がより客観的である、といえるだろう。

（イ）主観性が強いもの〔三十一例中三十例〕

「簡単に」のニュアンスが感じられるが、その意味を持つ絶対的基準が不明確な用例もある。

⑬せまい所に二人も入ったら、すぐ見つかってしまいます。　ろ 30

の場合、確かに二人でせまい所に入った時点から、誰かにそれを見つかるまでの時間の短さを表している。しかし、「見つかる」という可能動詞を「すぐ」が修飾することで、そこに簡単に事を成し遂げることを表す副次的な意味が加わったように感じられる。しかし、その副次的な意味を生じるための条件は特になく、その文を読んだ人の主観的判断によっているようである。

また、「簡単さ」のニュアンスが加わるか否かの基準となるものは何かと考えてみた。「簡単さ」のニュアンスが加わった「すぐ」の使用例と判断されるものを挙げて、「すぐ」の共起する語の特徴に注目し、文法的な面から考える。

純粋な時間の意味の「すぐ」は、意志的な動作を表わす語と結び付いていることが多い。「すぐ切る」、「すぐ洗う」などがその典型だろう。一方、たやすく事態が起こる意味での「すぐ」は、意志とは関係なく起こる事柄について用いることが多い。一つは何らかの出来事が起こって、ある感情や感覚が短い時間のうちに呼び起こされるという文の場合である。反射的に起こす行動もここに含めた。しかし、一方で動作主の意志とは関係なくもたらされる結果を表す語と結びつく場合も多い。

また可能動詞、可能の助動詞を伴う述部である「伝わる」「わかる」「おぼえられる」「見つかる」「もらえる」の

ようなものと結びつくものが多い。しかし、上記の特徴がある語と結び付くからといって、必ずしも「簡単さ」のニュアンスを持つわけではない。

⑭「すぐ入れます？」

は、可能動詞「入れる」を用いているが、発話時から長い時間待つことなく「風呂に」入ることができるかを尋ねた文である。

そういうわけで、この「簡単に」のニュアンスのある「すぐ」については、結び付く語に絶対的な基準はない。簡単さの意味はニュアンスに過ぎず、用いる人の感覚に依っている部分が大きいから規定できないのである。だから、ここで厳密な時間を表すのか、ニュアンスを含んで表すのかと考えて、意味を分けて捉える必要はないのである。

(b)「簡単に」の意味の例（一例）

この「すぐ」は、ある人や物が持つ性質が基で、決まった出来事にが起こりがちだ、という意味を持つ。I－(2)の意味の確認のところで述べた条件を満たしていない限り、この意味の「すぐ」とはいえない。

⑮みきぼうは黒くて、すぐ泣くから、黒雨ひめ、ぼくはけんかで、いつもどこかにキズをしているから、切られのよさぶろうなんやそうや。　ろ　124

⑮は、主題文の文型に、「みきぼうは黒くて、すぐ泣く」の部分が当てはまっていること、「みきぼう」という特定の人物を挙げて、主題が「個体名詞＋ハ」となっていること、解説部分の述部が「泣く」と現在形をとっていることから、「簡単に」の意味をとる「すぐ」の典型的な例文だといえる。

(c)空間の意味の例（三十一例）

場所同士や物体同士が近い距離にあることを、この「すぐ」は表わす。

平面上での近い位置関係ならば、

⑯すぐ前に派手なスポーツカーが割りこんだのだ。

ヴィ　124

のように、自分の車と「派手なスポーツカー」が同じ道路上でぴったりと前後に並んだ様子を示したものがある。また、

⑰とくにすぐ下にいる一家は、上で何か音をたてるとすぐ掛けてくる、それも悦夫が不在な昼間をねらって掛けてくる。　ヴィ　23

のように、物体同士が上下の関係で近くにあることを表すこともある。⑰で「掛けてくる」ものは電話である。これは階上と階下の住人同士の騒音をめぐるいさかいについて書いた文であるが、部屋同士が天井を隔てて上と下だという、ごく近い位置関係を「すぐ」によって表している。

また、目に見えない物、たとえば階級や年齢が、上下関係にありその位置づけが近いことを表すこともある。

⑱今年、すぐ上の姉が結婚した。　朝日　1995.11.14.

の文で、何人か兄弟がいる中で、結婚するのは、自分との年齢の開きが最も小さい姉だとわかる。次の

⑲健全なる中流のホテルが少なく、やたらに大時代で豪華な高級ホテルのすぐ下は、ずっと格の落ちる安ホテルになる。　ロン　142

は、ホテルの等級の上下という目に見えないものが話題となっている。

なお辞書では、「ここからすぐだからな」（父　63）のような用例を、必ず空間の例に入れている。しかし、実際は意味が文脈によっているので、短い時間のうちに目的地に到着する意味の「すぐ」なのか、短い距離の移動で容易に目的地に到着する意味での「すぐ」なのか、と特定できない。先の例の場合、移動について話題となっているので、短い時間で目的地まで行ける、簡単に目的地まで行ける、というニュアンスが感じられる。しかし、どちらかに特定できないというのは、本来は意味が一つなのだということの証拠だといえるだろう。そしてまた、生きた用法には、意味の小分類ができないものがあることの証拠ともなる。

2実態調査からの考察

以上の用例分類の結果を表にまとめると次のようになる。

時間の意味	時間の短さそのものを表す	一三一	一六三
	「簡単に」の意味	一	
空間の意味		三一	

用例数を見る限りでは、現代語において「すぐ」は時間の意味で、そしてその中でも一回性の事態が間がなく起こることについて、多く使われていることがわかる。現代語における「すぐ」の意味の中心はここにあるといえそうだ。

中心的に使われている理由を考えてみたが、意味の中に程度の差こそあれ、時間の要素を内在したものがすべて含まれていることに依っているのではないか。時間の意味のほうには派生的なものが存在する点で、空間の意味より拡がりがある。拡がりのある分、「すぐ」の意味を時に関わる意味で使う頻度も高くなるのではないか。

そして、『基礎日本語』では、

時間的な意味と場所的な意味の二面があり、「じき」より用法は広い。

と、用法の広さを指摘してもいるが、「すぐ」の時間の用法ひとつとっても、その用いる範囲が広いことも以下のように記述している。

・「すぐ」の基準点は話題中の任意の時点であって、必ずしも今、現在とはかぎらない。

・いずれも話題のその時点を基準点として言っている。この点が「もうすぐ」「まもなく」「程なく」と異なるところである。

このように、基準点のとり方について述べた部分がある。このことは用例の分類の中でも確認できた。また、

、「英語なんかすぐ話せるようになるさ」のような例を「直ちに」と言い換えることはできない。「直ちに」

は、ある状況が成立してから次の事態が成立するまでの時間の隔たりが「すぐ」より小さく、基準点からの間隔ではないからである。

と、「すぐ」の示す隔たりの幅がかなり任意なものであることを述べている。「間を置かず」出来事が起こることを示す「すぐ」であるが、そこには密接した出来事同士の意味が絶対的にあるわけではない。発話者にとって「小さい」と認識できる範囲での隔たりが、二つの出来事の間や、二つの場所や物体の間に存在するのである。このように意味範囲の広さがある語だから、小さい隔たりを表す場合によく用いられ、その結果、時間の隔たりの小ささの意味を持つ用例が多くなるのだと考えられる。

さて、「簡単に」の意味の用例数は、一六三例中一例と極端に少なかった。

そのわけは、I―2で挙げた三つの条件を満たさない限り、この「簡単に」の意味をとりえない、という厳しい制約があるからだろう。時間の意味、空間の意味で「すぐ」を使用する場合には、そのような制約はない。この条件の有無が、用例数の多寡に大きく影響していると考える。

この用例数から考えると、辞書のブランチで、ある程度の数が確認された時間・空間の意味のものと、この「簡単に」のブランチとを同列に扱ってよいか、という疑問が浮かんでくる。しかし、用例数が極端に少ないからといって、この「簡単に」の意味を無視するわけにはいかない。特殊な用法ではあるが、条件が揃うことによって、現代語の中で実際に使用されている限りは、一つの意味として立てざるをえないと考えるからである。

参考文献

『基礎日本語』森田良行　角川書店（一九七七年）

使用辞典（調査した一九九五年八月の時点で最新のものを使用した）

〈大型辞典〉

『日本国語大辞典（第一版）』小学館（一九七五年）

〈中型辞典〉

『大辞林（第二版）』松村明編　三省堂（一九九五年）

『広辞苑（第四版）』新村出編　岩波書店（一九九一年）

『講談社日本語大辞典（第二版）』CD-ROM版　梅棹忠夫他監修　講談社（一九九五年）

『学研国語大辞典（初版）』金田一春彦他編　学習研究社（一九八〇年）

〈小型辞典〉

『岩波国語辞典（第五版）』西尾実他編　岩波書店（一九九四年）

『旺文社国語辞典（第八版）』松村明他編　旺文社（一九九三年）

『現代国語例解辞典（第二版）』林巨樹監修　小学館（一九九三年）

『三省堂現代国語辞典（第二版）』電子ブック版　市川孝他編　三省堂（一九九二年）

『集英社国語辞典（第一版）』森岡健二他編　集英社（一九九三年）

『新選国語辞典（第七版）』金田一京助他　小学館（一九九四年）

『新明解国語辞典（第四版）』金田一京助他編　三省堂（一九八九年）

『例解新国語辞典（第三版）』林四郎　他編　三省堂（一九九二年）

〈その他：外国人対象の辞典〉

『外国人のための基本語用例辞典（第三版）』文化庁（一九九〇年）

（みやざき　りょうこ　静岡県立小山高等学校教諭）